放課後の教室で

「ヒロコちゃん、気にしてないの。昼休みのこと。」
くつ箱の前でアキコが声をかけてきた。昼休みにドッジボールをしてたときのことだ。外野から投げられたボールをヒロコがうまく受けられず、相手にとられてしまったとき、『もう、しっかりしてよ。』とマユミがせめたてたのだ。いやな気持ちがしたが、ヒロコは何も言えずにうつむいた。こういうとき、自分の思っていることをなかなか言えない。小さなころからそうなのだ。
「あっ、今日、習いごとがあるんだった。先、帰るね。」
そう言ってアキコはかけ出した。ふと見ると、アキコのランドセルにリコーダーが入れてある。ヒロコは足を止めた。
（リコーダー、教室だ。明日テストだから、持って帰って練習しないと。）
めんどくさいなと思いながら、ヒロコは教室にもどった。

放課後の教室はがらんとしていた。ヒロコがいそいで自分の席に向かおうとすると、何かが足に引っかかり、思わずこけそうになった。マユミのつくえの横にかかっていた体そう服入れだった。
「あぶないなあ、もう。かけたらだめって言われてるのに。」
いらいらしながら、足にからんだ体そう服入れを取り、マユミのつくえにたたきつけた。ふと、足もとを見ると、えんぴつが落ちていた。ヒロコはため息をつきながらひろった。名前が書いていなかったが、とりあえずマユミのつくえに置いた。とそのとき、ヒロコの頭を昼休みの出来事がよぎった。かあっと頭に血が上った。思わず、マユミのつくえいっぱいに、えんぴつでバツ印を書いた。
（書いちゃった……。でも、マユミちゃんが悪いんだ。）
えんぴつをマユミのつくえに投げ出し、逃げるように教室からかけ出した。
（どうしよう。明日の朝、マユミちゃんがあれを見たら……。みんなが来る前に行って消しちゃおうか……。）
その夜、ヒロコはなかなかねむりにつくことができなかった。

次の日の朝、ヒロコはいつもよりずっと早く家を出た。ドキドキする心ぞうの音を聞きながら、学校へと急いだ。校門が見えたそのとき、

「ヒロコちゃん。」

ふりむくと、マユミがかけよってきた。

「えっ、どうしたの。こんなに早く。」

「ちょうどよかった。昨日はごめんなさい。」

「……。」

「昨日の帰り、アキコちゃんに聞いたんだ。ヒロコちゃん、落ち込んでたって。ごめんね。わたし、むちゅうになってて、きつく言っちゃった。そういうこと、よくあるんだ、わたし。人のこと考えられなくて、本当にごめん。今度から、こんなことあったら、言ってね。」

マユミの言葉に、ヒロコはただうなずくしかできなかった。マユミは、ほっとした様子で、

「よかった。昨日、アキコちゃんに言われてから気になってしかたなかったんだ。それで、今日一番にあやまろうと思って、早く学校に来たんだ。よかった、ちゃんとあやまれて。でも、ヒロコちゃんも今日は早いね。どうしたの。」

マユミの言葉に、ヒロコの胸はドキンと鳴った。マユミは不思議そうにヒロコを見ていた。

（人のこと考えてなかったのは、わたしの方だ……。）

「マユミちゃん……わたし……。」

○　あなたは、ヒロコがしたことについてどう思いますか。マユミやアキコについてはどうですか。友達と話し合ってみましょう。

○　マユミの言葉を聞いたとき、ヒロコはどんなことを思ったでしょう。

○　友達と信頼（しんらい）し合い、助け合っていくために大切なことはどんなことだと思いますか。